

～ 稼げる茶業を目指して～

輸出に 取り組んで みませんか？



令和8年3月

静岡県経済産業部農業局お茶振興課



1 静岡茶の海外戦略	P3
2 輸出生産拠点とは	P4
3 輸出生産拠点一覧	P5
4 輸出拡大生産転換設備等導入支援事業について	P6
5 輸出拡大生産体制強化支援事業について	P7
6 輸出生産拠点モデル事例 (Ms カンパニー合同会社)	P8 - 9
7 輸出生産拠点モデル事例 (有限会社コバコー)	P10 - 11
8 輸出生産拠点モデル事例 (株式会社原田総合製茶)	P12 - 13
9 改植及び新植と有機実施時期について	P14
10 品種一覧	P15
11 基盤整備事業、有機栽培マニュアルについて	P16
12 地域計画、ChaOIプロジェクト推進事業について	P17
13 海外販路開拓支援事業について	P18
14 静岡茶ブランド推進事業について	P19

1

静岡茶の海外戦略

～ 1億人の国内市場から 81億人の世界市場へ ～

静岡県では、「稼げる茶業」の実現のため、緑茶の海外需要の拡大を踏まえ、輸出向け茶葉の生産体制の強化と世界展開を視野に入れた静岡茶ブランドの構築を両輪で推進しています。

現状

- 海外では抹茶を中心に緑茶の需要が拡大
- 海外で需要の高い抹茶や有機茶の生産量が不足
- 世界における「静岡茶」の認知度が低い

課題

- 輸出に対応した生産基盤の強化
- 世界市場での認知度向上

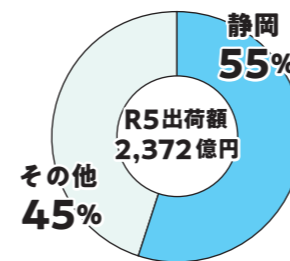
目標

- 輸出用茶園面積を施策展開により 800ha 増加

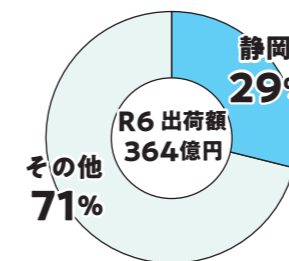
輸出シェアを国内シェア並へ拡大

800ha
(施策による
増加分)

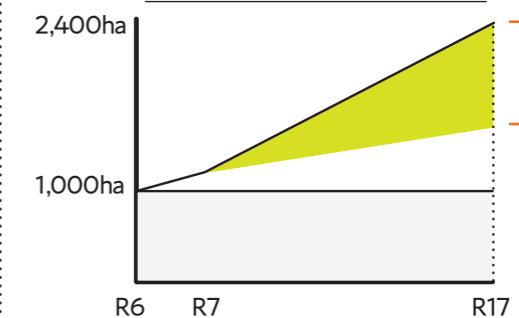
国内流通額シェア (R5)



輸出額シェア (R6)



静岡県の輸出向け茶園面積



3つの柱

01 輸出需要に対応した生産構造への転換支援

輸出向けの品種への転換や輸出向け茶葉の生産に必要な機械・施設の導入支援を行い、輸出需要に対応した生産体制の強化を図ります。

02 海外販路開拓支援

茶業関係団体等が海外展示会で行う静岡茶のPRや販路開拓を支援し、静岡茶の海外における認知度向上と市場開拓を図ります。

03 静岡茶ブランド推進

茶業関係者が一丸となって進める「静岡茶ブランディングプロジェクト」により、世界に通用する静岡茶ブランドの構築を目指します。

4 輸出拡大生産転換設備等導入支援事業について

目的

輸出生産拠点の生産者が有機茶やてん茶等への生産転換に向けた施設や設備等の導入を支援します。

事業実施主体 拠点化計画を作成又は参画している **茶生産者等**

補助対象となる施設又は整備等

上記目的に合致し、拠点化計画の実施に必要な取組であること。

- 例：
- 01 **有機転換**に向けた加工機械の導入
 - 02 **てん茶生産**に向けた被覆ユニットの導入
 - 03 生葉集荷施設の追加による**輸出用茶の生産拡大**
 - 04 GAP対応に向けた工場改修工事による**輸出用茶の高付加価値化**



補助率 1/2 以内、上限 1,500 万円

主な事業内容

- てん茶ライン増設工事
- 乗用型管理機及びアタッチメント
- 乗用型除草機、防除機
- 被覆資材の巻取機



肥料散布機

R7 取組状況

- 輸出に取り組む茶業者から 13 件の申請があり、審査会の結果、7 件を採択



ネット乾燥機

R8 以降 ● 事業を継続

5 輸出拡大生産体制強化支援事業について

目的

輸出生産拠点の茶生産者等が行う有機茶やてん茶生産に向けた品種への改植や、てん茶生産に必要な栽培体系等への転換を支援します。



支援メニュー

支援メニュー	支援内容	補助額
01	有機茶及びてん茶等の生産に適した品種への改植	15.2万円 / 10a 以内
02	有機茶及びてん茶等の生産に適した品種の新植 (R8 以降)	12万円 / 10a 以内
03	改植等に伴う植栽初期管理	14.1万円 / 10a 以内
04	「てん茶」生産のための被覆栽培への転換	10万円 / 10a 以内

支援対象者 拠点化計画を作成又は参画している **茶生産者等**

R7 取組状況

- 申請 90 件 (全て採択)

改植：	20.9ha
採択面積 植栽初期管理：	23.7ha
被覆栽培：	71.1ha

10年後の800ha拡大目標に対して、
施策により創出された
輸出用茶園面積 **92ha** (見込み)



輸出需要に対応した品種 (つゆひかり等) への改植



てん茶生産のための被覆栽培

R8 以降

- 市町と県で助成
- 新たに「新植」のメニューを追加

地域適応有機栽培とパートナー共創による 販売強化の両立型地域茶業拠点モデル

Ms カンパニー 合同会社（静岡県富士市）

静岡県富士市久沢 1223-1
代表社員：杉山 昌宏

富士山麓に位置し、茶園分布は、標高 150～600m。冷涼な気候と昼夜の寒暖差を活かした茶栽培が可能な地域で、かつ肥沃な黒ボク土や畜産堆肥の供給など有機てん茶の生産に適した立地である。全園での有機てん茶栽培を行い、グループ会員を増やして規模拡大を進めており、富士・東部地域の拠点工場としての役割を果たしている。

課題

- 茶価が低迷する中、産地の富士地域では、これまでどおり一番茶主体の煎茶の荒茶製造形態では、持続可能な経営が困難であった。
- 農作業と並行した販路開拓は困難を極め、ブランド構築や地域の強みの可視化といった専門的な営業戦略を欠いていた。

これらの課題を解決するため、生産構造の転換と人材確保に向けた取組を進めた。



成長・経営改善施策

成長施策

- 富士山麓の環境ポテンシャルに適合し、かつ相場に左右されにくい新たな製品として、有機てん茶の生産・製造へ転換した。
- 販売はパートナー企業と連携し、自社では「よい土・よい畑・よい茶づくり」を第一に、コア業務である有機てん茶製造に集中した。

経営改善施策

- 外国人実習生の受け入れや、グループ会員の拡大での労働力確保、営業や事務経験のある若手職員の新規雇用、販売の外部企業とのパートナー契約などによる業務の効率化を図っている。
- 生産構造転換のために必要な被覆資材や有機資材について、補助事業を活用し初期投資額を抑えている。

施策の特徴

生産

- つゆひかり、しずゆたか、ごこう等の品種茶の特性を活かして、全ての茶園で有機てん茶栽培を行っている。
- 富士山麓のなだらかな標高差による生育適期の推移を活かし、計画的な生産管理を確立している。

加工

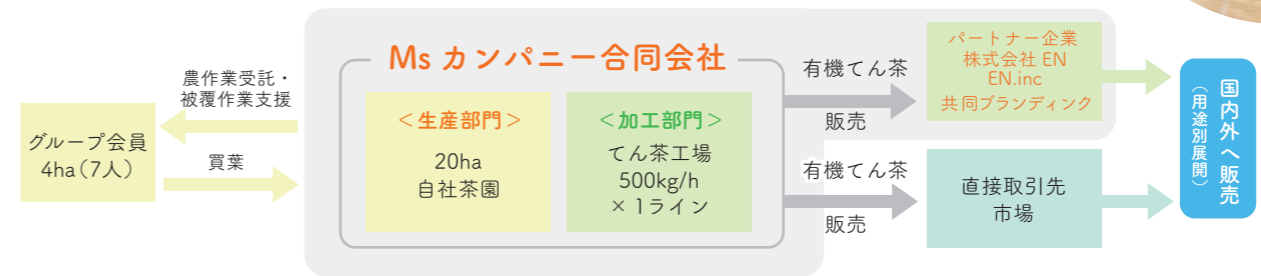
- これまで外部委託でてん茶加工を行ってきたが、令和7年秋から、自社工場にてん茶ライン（500kg/h×1ライン）を導入した。
- 製造において、仕上工程の選別機能を強化し、販売戦略に応じた碾茶製造が可能になった。

成果

- 富士山麓の地の利を活かした有機てん茶の生産体制を確立した
- パートナー企業との共創により強固な販売チャネルを確立し、本業の生産・製造に注力できている。



ビジネスモデル



今後の展望

- 令和8年4月から株式会社化し、「株式会社 Ms」として事業を進める。
- 県富士・東部地域でのグループ会員の拡大と、それぞれの有機茶園面積の拡大により、有機てん茶生産量を増やしていく。
- 生葉処理量を拡大するため、生葉コンテナやてん茶貯蔵施設など設備投資を行っていく。
- 富士山麓をオーガニックの産地として、地域ブランドを確立させ、次の世代に繋げる持続可能な農業を目指していく。

補足 > 有機転換面積を20ha（現状）から30haへ拡大する計画に伴い、常勤雇用を拡充させる見込みで、地域雇用創出拠点としての役割が強まる事が期待される。

Msカンパニーが創る 地域茶業拠点モデルの強み

Point 01 > 富士山麓の立地条件を高度に活用した有機てん茶栽培の確立

腐植に富み、保水力の高い富士山麓の土は、元来有機栽培に適しているが、より良いお茶生産を目指して、県内外の優良有機茶生産者から情報収集を行い、富士山麓にあった栽培技術を研究している。茶樹に負担をかけない年二回収穫とし、富士山麓に適した土づくりや整剪枝技術の試行錯誤など、日々改良を進めている。



Point 02 > 外国人実習生の積極活用による人材確保

有機てん茶栽培は、茶園管理や被覆作業など、多くの労働力を必要とするため、外国人実習生の受け入れを行いながら、人材を確保している。自社農園の規模拡大だけでなく、グループ会員の作業支援などにも寄与している。

Point 03 > グループ会員への技術・作業支援

有機てん茶栽培に踏み出せない要因として、被覆作業の人材不足があるため、グループ会員の要望に応え、被覆資材の貸し出しや、作業受託を行っている。また、グループ内では統一の肥培管理を行い、栽培指導も併せて実施している。

Point 04 > グループの広域化

工場が新東名の新富士ICのすぐそばにあるため、グループ会員が、御殿場、裾野、函南など県東部地域の広域に渡っている。有機栽培に興味があるが人手等がネックになっている個人農家などにも作業支援を行いながら、富士山麓エリアから広く生葉を集めていく。

Point 05 > パートナー企業との抹茶の共同ブランディング

てん茶を茶商に卸売りするだけでなく、パートナー契約を結んだ株式会社 EN. と共同で抹茶のブランディングを行い、抹茶の販路拡大を行っている。菓子メーカーへの原料供給や、海外の展示会への参加、地域でのイベントなどを EN. が行い、生産と販売の役割分担と協力を行っている。

有機てん茶を軸に本物志向で 差別化する地域茶業拠点モデル

有限会社コバコー【小葉香碾茶工場】（静岡県藤枝市）

静岡県藤枝市岡部町
羽佐間 648-1
代表取締役：小林 芳昭

- ・志太榛原地域に位置し、古くから玉露・被覆茶の産地として茶づくりが続けられてきた地域である。
- ・被覆栽培に関する技術や考え方が地域に根付き、てん茶・抹茶生産に適した土壌と技術的背景を有している。
- ・有機てん茶を事業の中心に据えた生産・加工を行っている。
- ・煎茶は自家消費を中心とし、事業としてはほぼ全量をてん茶生産に振り向ける構成としている。
- ・有機転換を進めながら、多品種・小ロット・レンガ式てん茶炉による品質重視の地域茶業拠点モデルを構築している。

経緯

- ☑ 有機栽培は家族の健康への配慮をきっかけに始まった。
- ↳ 当初は戦略ではなく「使わない選択」の積み重ねであったが、結果として農業に依存しない栽培体系を確立した。玉露産地としての被覆技術の蓄積が、有機てん茶への展開を支える基盤となっている。



成果

- 1 > 有機てん茶に特化した生産・加工体制が定着し、小規模ながらも安定した事業運営が行われている。
- 2 > 多品種・小ロット・レンガ式てん茶炉という姿勢が、国内外の本物志向の需要に応える形で評価されている。



成長・経営改善施策

成長施策

- ・てん茶を事業の中心に据え、品質づくりの考え方を明確にしたことで、経営の方向性が定まったことが転換点となっている。
- ・国内外の実需者から、「日本らしい高い品質」「本物志向」として評価されるようになり、安定した取引につながっている。

経営改善施策

- ・家族経営を軸に、人材配置や作業分担を見直すことで、小規模でも無理のない運営体制を整えている。
- ・設備更新についても、段階的に進めることで過度な投資負担を避けている。

施策の特徴

生産

- ・てん茶を中心に、有機転換を進めた茶園管理を行っている。
- ・この地域は玉露産地であり、被覆によって品質を作る考え方が古くから共有されてきた。
- ・現在も、直がけとトンネル被覆、棚がけを使い分け、被覆角度や光の入り方を調整することで、色・うま味・香りを意識した栽培管理を行っている。

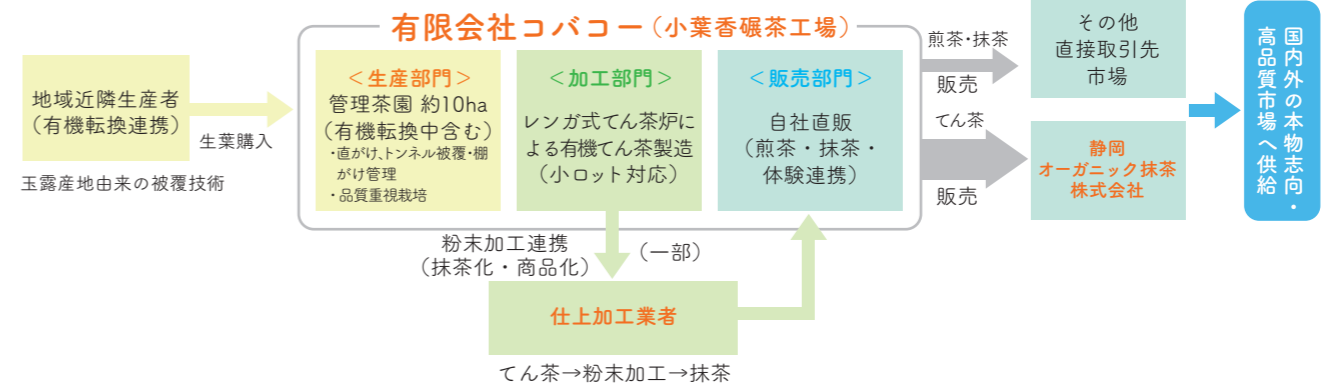
加工

- ・煎茶 120kg×0.5 ライン、てん茶 100kg×1ライン及び 100kg×2ラインを保有し、レンガ式てん茶炉による加工を行っている。
- ・効率重視の大量処理は行わず、品種や畑ごとの違いをきちんと出せるレンガ式てん茶炉での小ロット加工にこだわっている。

産地生産基盤パワーアップ事業を活用し、てん茶加工設備（100kg×1ライン）を整備。
令和7年度には新たにてん茶工場（100kg×2ライン）を取得し、2工場体制となる、加工の安定化を図っている。



ビジネスモデル



今後の展望

「つゆひかり」等、有機てん茶に向く品種への転換をさらに進め、有機てん茶を主体とした生産体制を確立していく。同じ考え方でてん茶づくりに取り組みたい生産者がいれば、近隣地域を中心に連携を広げていく方針である。

コバコーが創る 地域茶業拠点モデルの強み

Point 01 > 玉露産地の被覆技術を活かした品質設計

玉露産地として蓄積された被覆技術を基盤に、直がけとトンネル被覆、棚がけを使い分け、光量や角度を調整しながら茶樹の状態に応じた管理を実施。被覆方法が色沢・うま味・香りに与える影響を踏まえ、栽培段階から製品品質を設計する体制を確立している。



Point 02 > 多品種・小ロット対応のレンガ式てん茶炉加工

多品種・小ロットを基本とし、レンガ式てん茶炉による加工で品種や圃場ごとの個性を品質として表現。大量処理による均一化ではなく、丁寧な加工によって付加価値を高め、国内外の本物志向市場に応える差別化を実現している。

Point 03 > 有機てん茶特化による集中管理体制

事業を有機てん茶に特化することで、作業・設備・品質管理の判断基準を明確化。重点工程（被覆・収穫・加工）を絞り込み、小規模でも安定した品質を維持できる運営体制を構築している。

Point 04 > 家族経営と分担による持続性

家族経営を基盤に迅速な現場判断を行い、2工場体制で役割を分担。規模拡大を前提とせず、無理のない運営を継続することで、品質を維持しながら持続可能な体制を整えている。

Point 05 > 本物志向を軸とした差別化戦略

量や価格競争ではなく、被覆技術・有機転換・小ロット加工を組み合わせた品質重視の姿勢を明確化。玉露産地の強みを活かし、国内外の本物志向市場に応える差別化モデルを確立している。

経営多角化と共同管理で 支える地域茶業拠点モデル

株式会社 原田総合製茶 (静岡県掛川市)

静岡県掛川市原里 1285-1
代表者：高野 大介

・茶産地が集積する掛川北部地域で、茶園標高は概ね 50~200m に点在。
・荒茶製造を基盤とし、てん茶・受託加工を組み合わせた地域茶業拠点モデルを展開している。
・煎茶専門に依存しない加工・受託を進め、国内需要及び海外需要の双方に対応可能な体制を整えている。

課題

- ☑ 煎茶価格の低迷による収益性の悪化
 - ☑ 煎茶専門モデルの将来的な限界
 - ☑ 後継者・人材確保の難しさ
 - ☑ 輸出規格や設備対応の遅れ
- ↳ これらの課題を背景に、生産から加工・販売までを視野に入れた構造転換が必要となった。

成長・経営改善施策

成長施策

- てん茶・抹茶需要に対応した生産拡大
- 受託加工・業務用需要生産の増加
- 加工設備の整備による処理能力の向上

経営改善施策

- 加工設備をリース活用することで固定費負担を抑制
- 需要変動に応じた受託加工対応の強化
- 作業・被覆・資材管理を自社で標準化

施策の特徴

- 生産(外部委託)～販売・輸出(JA→茶商)までの連携体制を構築。
- 国内外を問わず、用途に応じた品質調整が可能。
- てん茶・紅茶・受託加工への展開により加工領域を拡張。
- 製品構成の多様化により需要変動リスクを分散し、収益基盤の安定化を実現。



令和6年度に処理能力600kg/hのてん茶炉を整備したことを契機に、煎茶製造中心モデルから高付加価値加工モデルへの移行が本格化。てん茶を軸とした加工・受託対応が進み、事業成長の大きな転換点となった。また、経営リスクを分散しながら、収益性の確保と安定稼働の両立を図った。

今後の展望

- ・有機てん茶の安定供給体制の強化
- ・海外需要を見据えた品質・規格対応の継続
- ・地域内外の生産者を受け入れる拠点機能の拡張

有機転換は現在進行中であり、2028年に有機JASの認証予定で、持続的な地域茶業モデルの確立を目指している



原田総合製茶が創る 地域茶業拠点モデルの強み

Point 01 > 生産～加工を一体運用できる

生葉の状態に応じて加工判断・品質調整まで拠点で完結でき、複数の用途への対応が可能。

Point 02 > 被覆・管理を拠点集約できる

被覆や管理作業を法人として担うことで、農家の負担を抑え、品質の安定したてん茶生葉を生産できる。

成果

1 > 加工設備・処理能力

- 煎茶：180kgライン×1.5系列
- てん茶：600kgライン×1系列(令和6年度整備)

2 > 売上・経営面

- てん茶設備整備後、売上は右肩上がり
- てん茶関連売上が事業全体の中核へ移行

てん茶の受託加工は、今後も拡大

3 > 生産基盤・人材

茶園面積：約24ha(2025) ▶ 50ha(2035)へ拡大予定

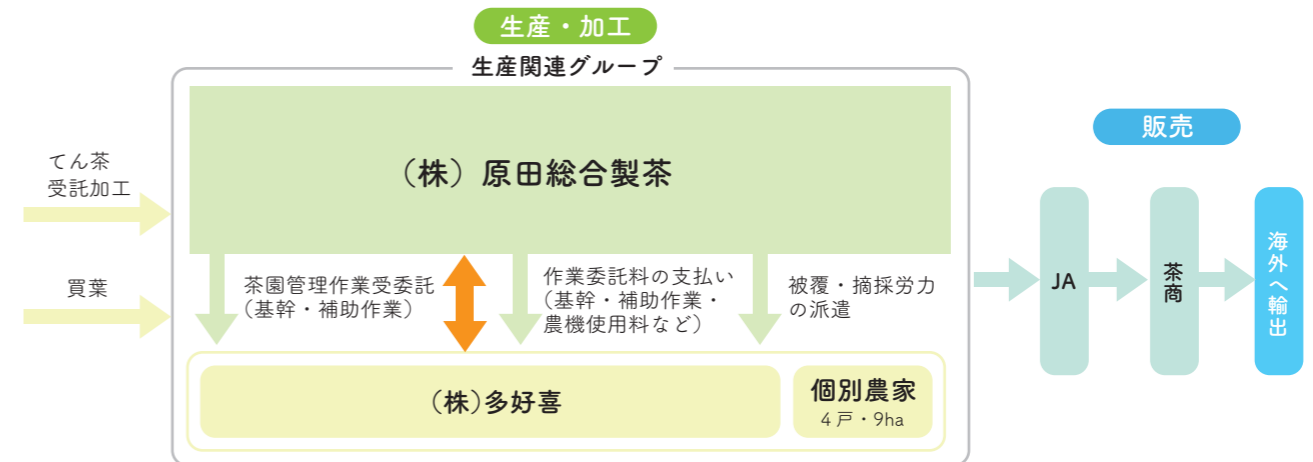
雇用人数： 生産・加工あわせて役員4人、社員5人、パート10人

有機転換・地域波及： 有機転換中(2028年認証予定)
廃止予定の集荷場に出荷されていた生葉の受け入れや、個人生産者の参画により、地域の生産基盤維持に寄与



ビジネスモデル

煎茶、てん茶、紅茶の安定生産と経営体制づくり



Point 03 > 煎茶製造依存からの脱却と拠点機能の強化

煎茶に加え、てん茶・紅茶・受託加工を組み合わせることで、需要変動に強い事業構造を構築。収益の安定化を実現。

Point 04 > 「作る側に集中」できる分業設計

販売・流通はJAや商社に分業し、拠点は生産と加工に集中している。地域に“作れる拠点があること”が強み。

静岡県では、茶園の早期盛園化と有機茶の安定生産を目指して、定植1～2年目は慣行栽培を行い、3年目から有機栽培に転換する体系を推奨します。



改植及び新植と有機実施時期例

栽培体系	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目頃
慣行	慣行	→		成園化		
有機	有機	→				成園化
有機転換	慣行	→		有機	→	成園化

○定植1～2年目の管理

- 高温・小雨時等のかん水を徹底
- 雑草の発生抑制や土壌の保湿・物理性改善等を図るため、敷き草や枝条チップの投入等を行う
- 風が強い場所では、防風垣の設置やソルガム等の間作により防風対策を行う

○定植3年目以降の管理

- 定植3年目から有機栽培に転換
- 「つゆひかり」等の樹勢に強い品種は、定植4年目の一番茶から機械摘採が可能

県の奨励品種「つゆひかり」の紹介

- 生育が非常に良く、一番茶から秋冬番茶まで安定して多くの生葉を収穫できます。
- 炭疽病に強く、有機栽培にも向いています。



近年注目の茶品種



品種特性	品種名	早晩性		樹姿	樹勢	耐寒性		耐病虫性			収量性	品質	育成場所	登録年(種苗法)
		摘採期	萌芽期			赤枯れ	炭疽病	赤焼病	クモカラムシ					
耐病虫性多収性	つゆひかり	-2日	-1日	中間	極強	強	強	弱	-	多	色沢・水色明るい てん茶にも向く	静岡県	2003	
	しずゆたか	+6日	-1日	開張型	強	やや強	強	中	中	極多	色沢鮮緑 甘みある香味		2024	
	なんめい	-6日	-10日	直立	やや強	やや強	中	弱	強	多	色沢濃緑 スッキリした香氣		2014	
	さえあかり	-4日	-5日	中間型	強	やや強	強	強	強	多	色鮮緑 穀物香 (あさつゆ系)	農研機構	2012	
	かなえまる	-1日	±0日	やや開張型	やや強	強	やや強	弱	強	多	温和な香味 かぶせ茶・玉露 に向く		2022	
	暖心37	-1日	-2日	やや直立型	やや強	強	強	弱	中	多	色沢良好 かぶせ茶、 釜炒り茶に向く	宮崎県	2021	
	はるのなごり	+3日	+4日	開張型	やや強	やや強	強	弱	強	多	色沢濃緑 半発酵茶にも向く		2012	
さやまあかり	-1日	±0日	やや直立型	やや強	やや強	強	-	強	極多	「さやまあかり」 の色沢改善 香氣や滋味も改善	埼玉県	2021		
てん茶向き	せいめい	-4日	-7日	やや直立	やや強	中	中	中	弱	多	色沢良好 渋みが少ない	農研機構	2020	
色の良い早生	きりり31	-3日	-4日	中間型	強	やや強	弱	やや弱	極弱	多	色沢鮮緑 被せ茶や玉露 にも向く	宮崎県	2016	
	はると34	-5日	-7日	中間	強	やや強	弱	やや弱	極弱	中	色沢鮮緑 被せ茶に向く		2020	
特徴的な品質(香味・色)	しずかおり	-2日	-8日	中間型	やや強	やや強	中	やや弱	中	多	色沢濃緑 甘い香り、うま味		2015	
	ゆめすみか	±0日	-13日	やや直立型	強	強	やや強	やや弱	やや弱	多	桜葉のような香り (煎茶) スマイルのような香り (萎凋)	静岡県	2024	
	ゆめするが	+4日	+3日	中間型	強	強	弱	中	やや弱	中	色沢鮮緑 温和な滋味		2012	

茶産地の構造を転換する基盤整備の推進

(静岡県農地計画課)

拠点化計画の具現化を支援するため、輸出拡大生産体制支援事業と連携し、生産性を向上させる基盤整備を実施します。

整備の内容

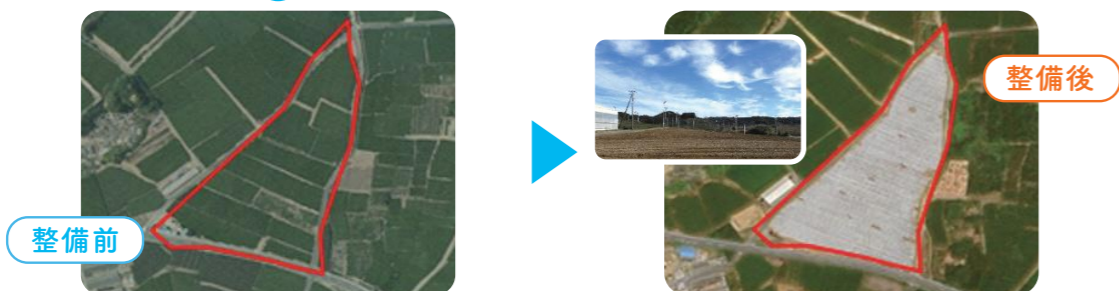
- 区画整理や区画拡大、用排水施設、暗渠排水など

実施事例

① 大規模な基盤整備 (県営事業)



② 小規模な基盤整備 (農業者直営施工)



茶改植と小規模基盤整備の組み合わせ例



茶の有機栽培マニュアル情報

令和7年12月に静岡県食と農の振興課が、新しく茶の有機栽培マニュアルを作成!! お茶振興課 HP にも掲載しています!!



地域計画について

地域の茶園を守るため、地域計画に取り組みましょう!!

(静岡県農業ビジネス課)

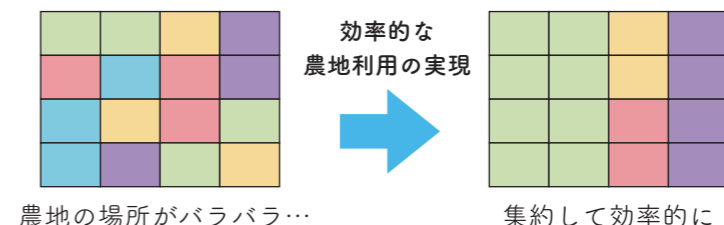
地域計画とは

- 農業者や地域のみなさんの話し合いで作る、将来の農地利用の姿を計画した**地域農業の設計図**です。

策定主体 | 市町 県内 34 市町 242 地域で策定済 (令和8年1月末時点)

- 地域計画は、一度作って終わりではなく、継続的な話し合いによって内容を充実させていくことが重要です。
- 農業者の皆様は、各地域の**話し合い等に積極的に参加**いただき、規模拡大意向など地域農業を維持するために活発な意見をお願いします。

イメージ図



ChaOIプロジェクト推進事業について

概要

ChaOIフォーラム*

会員による静岡茶の需要創出に向けた取組に対する支援です。

補助金の支援メニュー

- ① 新商品開発支援事業
静岡茶の新商品開発・研究
- ② 販路開拓支援事業
静岡茶の新たな販路開拓
- ③ 複合作物のスタートアップ支援事業
茶業経営安定化のための複合作物導入支援
- ④ ドリンク需要に応じた生産構造の転換支援事業
ドリンク原料茶向け生産転換支援
- ⑤ 高付加価値茶生産への転換支援事業
高付加価値茶への生産転換支援



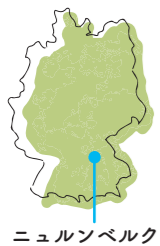
*Cha Open Innovation フォーラム
茶生産者、茶流通業者や食品、観光業、大学、研究機関等からなり、異業種間の連携により新たな価値の創造に取り組みます。



- 静岡茶の輸出拡大を図るため、大規模展示会への出展を支援する事業。
- 茶業関係団体及び産業支援機関等で組織するコンソーシアムが連携して行う、海外での販路開拓の取組を支援します。

R6実績

実施主体	静岡茶の輸出額 100 億円計画コンソーシアム (県茶業会議所、JA 静岡経済連、静岡銀行)	
展示会名	BIOFACH 2025	World Tea Expo 2025
期間	2025 年 2 月 11 日～14 日	2025 年 3 月 24 日～26 日
場所	ドイツ・ニュルンベルク	米国・ラスベガス
参加者	単独出店 3 社、代理出店 3 社	単独出店 10 社、代理出店 4 社
実績	有効面談件数 150 件	有効面談件数 741 件



ニュルンベルク



ブース写真 (World Tea Expo 2025)



ブース写真 (BIOFACH 2025)



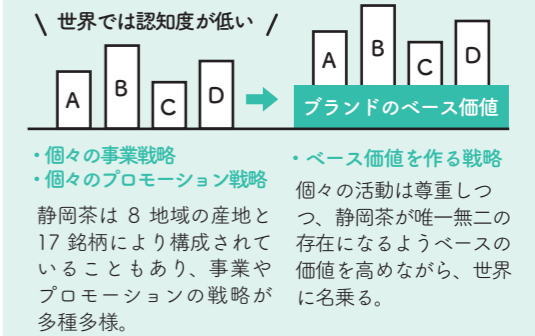
ラスベガス

R7実績

実施主体	静岡茶の輸出額 100 億円計画コンソーシアム (県茶業会議所、JA 静岡経済連、静岡銀行)	
展示会名	BIOFACH 2026	World Tea Expo 2026
期間	2026 年 2 月 10 日～13 日	2026 年 3 月 23 日～25 日
場所	ドイツ・ニュルンベルク	米国・ラスベガス
参加者	単独出店 4 社、代理出店 3 社	単独出店 12 社、代理出店 5 社

概要

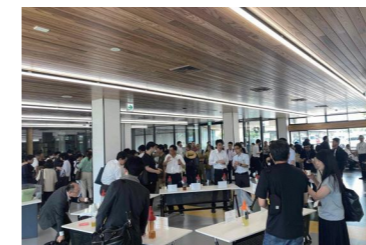
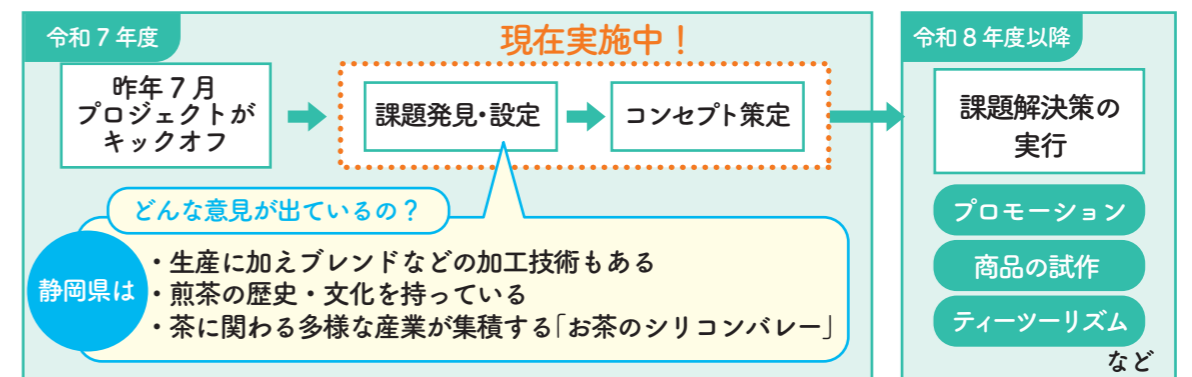
- 世界における静岡茶の認知度向上のため、静岡茶の価値をゼロから見直し、日本発の**グローバルブランド**として確立を図る事業です。
- 行政、茶業関係団体、生産者及び茶商等が連携し、「**共創**」をテーマに一丸となって持続可能な茶業の未来を切り拓く取組です。
- 静岡茶を単なる産地としてではなく、世界中のどこから見ても一つのブランドとして認識される存在に育て、各産地の特色を尊重しながら共通のベース価値を共有し、高め合うことで全体を押し上げていくことを目指します。



内容

- 多様な産地や技術等の静岡茶が持つ本来価値をシンプルに分かりやすく整理・言語化することで、世界市場に訴求する唯一無二のブランドを構築します。
- 象徴的となるブランドロゴマークや、公式サイトなどの情報発信ツール、世界市場へのプロモーションを強化します。
- 生産者や茶園の風景、静岡茶の歴史など、静岡茶の本来価値を向上させるティーツーリズムなどの取組も進めていきます。

スケジュール



キックオフミーティングの様子



意見交換の様子



ティーツーリズム展開イメージ

お問合せ先

静岡県経済産業部農業局お茶振興課

〒420-8601 静岡市葵区追手町9番6号

TEL **054-221-3297**

E-mail ocha-shinko@pref.shizuoka.lg.jp

お近くの県農林事務所

富士農林事務所 企画経営課	〒416-0906 富士市本市場 441-1	fuji-kikaku @pref.shizuoka.lg.jp	0545-65-2197
中部農林事務所 企画経営課	〒422-8031 静岡市駿河区有明町 2-20	AFO-chubu-kikaku @pref.shizuoka.lg.jp	054-286-9262
志太榛原農林事務所 企画経営課	〒426-0075 藤枝市瀬戸新屋 362-1	AFO-shidahai-kikaku @pref.shizuoka.lg.jp	054-644-9225
中遠農林事務所 企画経営課	〒438-8558 磐田市見付 3599-4	nourin-chuen-kikaku @pref.shizuoka.lg.jp	0538-37-2285
西部農林事務所 天竜農林局 地域振興課	〒431-3313 浜松市天竜区二俣町鹿島 559	seinou-ten-chiiki @pref.shizuoka.lg.jp	053-926-2192

お茶振興課ホームページ



お茶振興課TOPページ



拠点関係ページ